

# 特別な教育ニーズのある子どもとのコミュニケーションⅩ

ー子どもらがともに学ぶ場の意味に着目してー

○松本彰之\*<sup>1</sup>

河野文子\*<sup>2</sup>

（ボランティア学習室エスじゅく\*<sup>1</sup>）

（筑波大学 附属桐が丘特別支援学校\*<sup>2</sup>）

KEY WORDS: コミュニケーション 学習支援 居場所

（はじめに）

これまで、公立小学校の特別支援教室専門員という教師とは異なる立場で、子どもたちの気持ちに寄り添ったコミュニケーションを通じて知り得た当事者側の事情を、正しく大人側に伝えた。問題を抱える子どもたちの中には、障碍ゆえの困難の他、外国籍及び、日本語を母国語としない両親を持つ者等も多かった。すべての子どもたちが、考える力や自尊心、豊かな感情をもって生き生きと過ごせる社会であるべきだ。

昨年より、新型コロナウイルス感染症の流行は、世界中の人びとの生活を一変させた。子どもたちを取り巻く環境は日々厳しさを増し、子どもたちの成長のために欠かせない居場所（ともに学ぶ場）が、急速に失われている。以下、ボランティア学習室（以下学習室）の事例を報告する。

（目的）

本研究では、子どもたちが学校を離れた場面で、居場所（ともに学ぶ場）を形成するために、どのような配慮が必要でありどのような条件が求められるのかを学習室での実践を通して明らかにすることを目的とする。とくに今回は、障碍のある児童生徒を中心に、当事者側の事情を大切にしたいコミュニケーションによって、彼らのもつ課題を探り、ともに解決策を考える一助としたい。

（方法）

なお、本研究及び発表を行うにあたり、対象児（ご家族）に口頭にて内容の確認をし、本研究発表以外では使用をしないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、書面にて署名により同意を得たものとした。

対象児：肢体不自由のある児童生徒 7 名

（小学生 3 名、中学生 4 名）指導者 4 名

期 間：20XX 年 7 月～20XY 年 9 月（14 ヶ月）

場 所：〇〇区立〇〇地域センター集会所（洋室）

時 程：9:00～11:30 算数または数学、国語、英語

（内容）

(1) 脳性麻痺があり上肢及び下肢に動き難さがある。車椅子での自走は可能な A は、肢体不自由特別支援学校中学部 3 年に在籍している。学習意欲が高く、自分で問題演習を行なって学習を進めることはできる。コロナ禍で在籍学校がオンライン授業となった。A は、当初、学校に通学せずに学習できると、非常に前向きだった。A は、「家族が PC 関係の仕事をしているため、自分も抵抗ない」ということであった。実際に、家族は A の教育について非常に協力的であった。しかし、オンライン授業が続く友人らと直接会えない時期が続いた。家庭での学習で集中できないことが増え無表情になりがちとなった。特にオンラインでの授業が嫌ではないが、「毎日でつまらない」という。家族との会話もなくなり保護者の希望で、学習室に参加した。問題集のわからないところを担当員に教えてもらうという形の学習であった。視知覚認知の課題では、丁寧な担当者の指導で「コツをつかんだ」と笑顔が弾けた。休み時間、ともに学ぶ子どもらと会話が弾んだ。家庭でも本来の明るい表情が戻ったとのことだった。

(2) 脳性麻痺（右片麻痺）の B は、独歩が可能であり上肢に若干の麻痺があるが、書字を含め生活関連動作は自立している。肢体不自由特別支援学校小学部 5 年に在籍している。学校では、授業の内容によっては、参加できず離席がちだった。家庭での学習に保護者は協力的であるが、行き詰まることが多くあり、保護者の希望で学習室に参加した。当初の数回は緊張のためか、提示のプリント教材にも手が付き難かった。B の心情に配慮してコミュニケーションを活発にしたところ、場に慣れ、集中が継続するようになった。飽きても担当者との会話を支えに再び取り組む。自分の頑張りを認めてもらうために、担当者に手招きして自分の横の席に座って欲しいと要求することが増えた。

（結果）

(1) A は、決して自分から積極的に話題を拡げて活発に話をするタイプではないが、周囲に友達の会話をよく聞いていて、そこに時々自分が参加してやりとりを楽しむタイプであった。これは、友達が側にいるのが普通の学校では自然にあった状況である。しかし、オンライン学習でそれが困難となりバランスが崩れたと考えられる。学習室では、コロナ禍でも感染症対策を充分に行なったうえで、対面で実施した。A は月に数回の限られた時間で、本来のリズムを取り戻した。その後、緊急事態宣言下、対面での学習室を一時休止せざるを得なくなった。本人、保護者と担当者が話し合い、オンラインでの学習室を実施した。オンラインでの学習室では、学習内容はもちろんであるが、A の心情に配慮してのコミュニケーションを重視して、やりとりを行なったところ、A も意欲的に楽しく参加でき、終了時には「次回はいつ?」と聞いてくるほどであった。

(2) B は、学校生活のなかで不適応な場面に遭遇するとうまくコミュニケーションがとれなくなり、その状況を引きずりがちであった。学習室では、徹底して B の心情に配慮して共感を重視してのコミュニケーションを行なった。その際に、周囲で他の子どもたちの様子を一緒にながめながら、B も頑張っている仲間の中にいることを確認させるようにした。その結果、B の自己肯定感が高まり、B は自分からその状況を形成できる場として、自分の中で学習室の位置付けを行なった。学習室での頑張りで高まった自己肯定感で、学校生活でも、不適応な場面での立ち直りが早くなってきた。

（考察）

ボランティア学習室は、子どもたちにとって、学校や家庭以外の居場所（ともに学ぶ場）、学校や家庭では満たされないものを満たす場として、有効に機能しつつある。とくに、コロナ禍では、大人が疲弊していることが強調されがちであるが、子どもたちもまた多くの支えを必要としている。子どもたちが自分たちの育とうとする力を支えるために、子どもたちがともに学ぶ場と、当事者側の心情に配慮してのコミュニケーションは必須条件である。これからも、実践を継続し子どもたちがともに学ぶ場を創っていききたい。(MATSUMOTO Akiyuki, KAWANO Fumiko)